



発行所
宗教法人 真宗大谷派名古屋別院
代表者 伊藤 修
〒460-0016 名古屋市中区橋2-8-55
tel.(052)321-9201 fax.(052)321-3184
●東別院ホームページ「お東ネット」
<https://www.ohigashi.net/>
●購読料(送料共)一部150円・1ヶ月1500円
郵便振替00870-0-37195

12月
2024
vol.701

「東別院こども報恩講」報告	5面
ご案内 報恩講	8面

星川 啓慈
大正大学文学部特任教授

人の心の中に 平和の砦を 築くために

はじめに

現代の戦争はいろいろな意味において非常に複雑です。最近の一例をあげると、ウクライナとロシアの戦争で、ロシアと闘っている「ロシア義勇軍団」「自由ロシア軍団」の構成員の多くは、ロシア人です。また、二つの軍団は共にロシアと闘っていても、思想的にかなり異なっています。

特集第2回(10月号)では、平和と対極の「地獄」について源信僧都の著書『往生要集』を通してたずねました。今回は、平和を求めながら地獄を作り続ける人間に、「真の世界平和」が到来する可能性や具体的な行動規範、宗教の役割について考えます。



戦争は「国同士が行なうもの」との考え方は、おそらく『戦争論』を書いたC・クラウゼヴィッツの時代(19世紀)から意識されるようになってきた、と推測します。しかし、『新戦争論』を書いたM・カルドーも主張しているように、戦争はそうした側面をもちつつも、もはや単純に「国家間の争い」とはいえないものとなっています。これは先の事例からもわかります。

戦争はなくならないのか

ここでは「戦争」という言葉を使いますが、これは必ずしも国家間の戦争に限らないことを、覚えておいてください。

これまでの人類の歴史をふり返ると、いつの時代にも戦争がありました。J・バベルの推計では、記録が残っている約5500年のうちで、世界が平和であったのは、わずか300年足らずだったそうです。それほど人類は戦争をし続けてきたのです。さらに、M・クレフェルトは「今後も戦争はなくならない」と論じているうえに、「宗教思想・宗教的信念・狂信は武力衝突の動機のなかで、今後はさらに大きな役割を果たしそうだ」と予想しています。

研究者たちがこのようにいうのであれば、私たちは「いつまでたつても平和な世界は訪れないのではないか」「宗教は戦争を押し進めるだけなのか」という不安に駆られます。

その一方で、S・ピンカーの名著『暴力の人類史』によれば、宗教が絡むか否かは別として、戦争によって命を奪われる人間の「割合」(絶対数ではありません)は歴史の流れとともに減少してきているそうです。こういう研究結果を知ると、今度は「まだまだ人類に望みはありそうだ」という気分になりますね。

宗教は戦争の直接の原因とはいえない

世界の宗教の信者たちの多くは、自分が信じている宗教が「戦争の原因であった」とか「戦争に加担した」という事実を知ったとしたら、がっかりするに違いありません。しかし、戦争に「加担」した事実はあるとしても、「宗教が戦争の直接の(単一の)原因か」というと、それは、ない、と思います。

皆さんもご存じのように、日本では実に多くの宗教が混在しながら、日本的な「宗教の多元的状况」を創り出しています。もしも宗教が戦争や武力衝突の直接の原因であれば、日本では頻繁に宗教間でそれらが生じているはずですが、しかし、そういう事実を耳にすることはまずありません。この単純な

シリーズ「宗教と平和」 第3回 人の心の中に「平和の砦」を築くために

(1面より)

事実からも、宗教が戦争や武力衝突の直接の原因になること
はない、といつてよいでしょう。

戦争は、領土拡大の欲望、富への欲望、民族的対立、政治
的対立、歴史的背景を始めとして、多数の要因が直接・間接
に絡み合っただけの起るものです。

ただし、宗教はいつたん戦争が起こると、または起こりそ
うになると、その戦争に「宗教的意味付け」をして、人々を
戦争に駆り立て、戦争をエスカレートさせる側面があること
は、肝に銘じておかなければなりません。

ユネスコ憲章(前文)の再確認

第二次世界大戦の悲惨さを反省し、1945年に国際連合
(国連)が設立されました。しかし、現在のウクライナとロ
シアとの戦争、イスラエルとイスラム組織ハマスやヒズボラ
との戦闘などに、その国連が適切に対応できていないと思え
ません。悲しいかな、人間は反省をしても、時間がたてばそ
れを忘れてしまうのでしょうか。

ここで、1945年に国連で採択されたユネスコ憲章(国
際連合教育科学文化機関憲章)の前文の前半部分をふり返っ
てみましょう(傍点は引用者)。

戦争は人の心の中で生れるものであるから、人の心の中
に平和の砦を築かなければならない。

相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じ
て世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこした共通の原因で
あり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまり
にもしばしば戦争となった。

ここに終りを告げた恐るべき大戦争(第二次世界大戦)
は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という民主主義の原理
を否認し、これらの原理の代りに、無知と偏見を通じて人
間と人種の不平等という教義をひろめることによって可能
にされた戦争であった。

文化の広い普及と正義・自由・平和のための人類の教育
とは、人間の尊厳に欠くことのできないものであり、且つ
すべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって
果さなければならぬ神聖な義務である。

政府の政治的及び経済的取極のみに基づく平和は、世界

の諸人民の一致した、しかも永続する誠実な支持を確保
できる平和ではない。よって平和は、失われなければならない。
人類の知的及び精神的連帯の上に築かなければならない。

傍点を付したところに注目してください。「政府の政治的・
経済的取極のみに基づく平和」は危ういのです。各国の政府間
の取極にもとづく国連は、結果的に「世界の人々の一致した
永続する誠実な支持を確保」できなかった、といわざるをえ
ません。これは、現在の国連が先に言及した二つの戦争をめ
ぐって一種の機能不全に陥っていることから、推測できま
す。やはり、「人の心の中に平和の砦を築かなければならな
い」のです。

誤解のないように述べておきますが、私は国連の存在を否
定するつもりはまったくありません。反対に、世界平和をめ
ぐって国連にはもっと適切な活動をしてもらいたい、と願っ
ています。だからこそ、以下で人の心の中に「平和の砦」を
いかに築くかを考えたいのです。

「平和を欲するならば、
戦争を理解せよ！」

私は、大学の授業で15年以上にわたって、太平洋戦争を題
材に授業をしてきました。その授業では、最新のネットの情
報も縦横無尽に盛り込みながら、戦争一般について教え、戦
争の悲惨さを学生諸君に知ってもらうことに傾注してしま
した。その理由は、英国の著名な戦略思想家である、B・リ
デルハートが述べたとされる「平和を欲するならば、戦争を理
解せよ！」という言葉は、やはり重要だと感じるからです。

戦争の悲惨さを知るといえば、私たちは、テクノロジーの
発達によって、ほぼリアルタイムで最新の戦争の情報や動画
に触れ、そこから戦争の悲惨さを学び続けています。皆さん
もそれらに触れて、心底、平和の尊厳や重要性を認識してい
ることでしょう。

もちろん、各国の政府レベルの取極は大切ですが、それを
しつかり支える必要があります。この意味で、各国の国民の
一人ひとりのレベルで、戦争に反対し世界平和を実現する願
望・意志を、これまで以上に育まなければなりません。

そして、その根底には、他者をリスベクト(尊重)すると

いう、一人ひとりの人間としての態度が必要です。程度の差
はあれども、一般の人々は種々の欲望・妬み・偏見・憎しみ・
対立・競争心なども抱え込みながら生きています。それでも、
他者をリスベクトする態度が、表層的ではない真の世界平和
の実現には不可欠だと思います。

自分を大切にすることから
他者の尊重へ

アイデンティティ＝自分であることは、他者が居て初めて
もたらされるものです。他者が存在して初めて自分が意義あ
る存在となります。もしも自分一人しか存在していないとす
れば、「自分」という言葉を使う必要はありませんし、「自分
とは何か」などと考えることはできません。他者が在ったの
自分です。

「我執」を離れることを説く仏教に造詣の深い皆さんには
敬遠されるかもしれませんが、私はまずは「自分を確立する
こと」「自分を大切にすること」が必要かつ重要だと感じま
す。現実問題として、他人のことは自分のことほどよくわか
らないでしょう。まず
自分の状態を認識し
て、それを他者に投げ
入れて他者を類推的に
知る、というのが通常
の他者理解の仕方では
ないでしょうか。

確たる自分をもつか
らこそ、自分を大切に
するからこそ、他者
も自分と同様の「確た
る自分」「大切な自分」
があることが分かります。
そこで初めて、自
分と同じように「自
分」をもつ他者を、リ
スベクトすることがで



イスラエルのガザ侵攻を伝える新聞各紙。双方に犠牲者が増え続けている



Photo by T.Watanabe

◆筆者紹介
ほしかわ・けいじ

1956年、愛媛県生まれ。1984年、筑波大学大学院博士課程単位取得退学。現在、大正大学文学部特任教授。博士(文学)。専攻は宗教哲学。単著『対話する宗教——戦争から平和へ』(大正大学出版会)、共著『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか?』(並木書房)。

きるようになるのではないだろうか。すなわち、自分を大切にすることは、結局、他者を大切にすることに繋がるのである。
ユネスコ憲章にも「相互の尊重」「相互の援助」「相互の関心」という言葉が見られます。これらはまさに、確たる自分や大切な自分があるからこそ、相手にもそうした「自分」があることを認めることができ初めて、真の意味をもつのではないのでしょうか。
たしかに、他者のリスベクトが世界平和の実現に直結する



重要文化財 當麻曼陀羅圖(貞享本) 青木良慶・宗慶筆 貞享3年(1686) 奈良・當麻寺蔵(画像提供:奈良国立博物館)
浄土の世界が争いや武器のない世界として表されている

再建され、平和がもたらされたのです。

おわりに

私の話は観念的・理想主義的に聞こえるかもしれませんが、また、表層的ではない「真の世界平和」は、残念ながら、近い将来には到来しないでしょう。だからといって、それを諦めることはしたくありません。仮に「真の世界平和」が実現されないとしても、それを「究極概念」として措定し、それに向かって前進することは、私たちの生き方をさらに意味あるものにしていくのではないのでしょうか。
真宗の皆さんが、真宗の立場から、ここで私が述べたことを改めて考え直してください。大変うれしく思います。

column

宗教の陥穽

一向一揆を例として

宗教と平和、宗教と戦争。近年のロシアによるウクライナ侵攻とそれを支持するロシア正教会の関係。またイスラエルとパレスチナの対立を目的に、改められて考えさせられる問題である。
本来宗教は「戦争を止める力」を持つものである。実際、自らの信仰に基づき命をかけて戦争に反対した人は大勢いる。しかし本文でも触れられている通り、逆に宗教の名のもとに戦闘行為の正当化が繰り返されてきたのも確かなのである。
戦国時代、本願寺教団が経験した一向一揆にも、そのような一面があることを忘れてはならない。大坂本願寺を始め有力寺院を中心に寺内町を形成し、真宗信仰に基づいた自治組織の確立という華々しいイメージがある一方で、「仏敵討伐」の号令のもとに武装闘争が行われたのも歴史的事実だからである。天下統一を目指す織田信長と11年にわたって戦われた、いわゆる石山合戦では、純粋な「愛山護法」の精神が、門徒衆を戦場へ駆り立てる上で誠に都合の良い論理となつてしまった。それは、駆り立てた本願寺側の史料に

激・依頼・謝礼の言葉はあっても、管見の及ぶ限り、慚愧と懺悔の言葉が見出されないことから裏付けられるように思う。
平和であることを願いながらも、平和を求めて戦う。愛することを説きながらも、愛するものを守るために戦う。人は常にこの陥穽にはまる可能性があることを歴史は教えてくれている。(小島)



錦絵 石山本願寺合戦 一陽斎豊宣筆・明治16年(1883) 和歌山市立博物館蔵
織田軍を迎え撃つ雑賀衆などの本願寺勢

シリーズ「宗教と平和」と題し、これまで3回にわたって考えてきました。今回星川氏は、宗教が戦争をエスカレートさせる側面と、宗教が平和に貢献する可能性について指摘されています。阿弥陀仏の浄土は、地獄のような世界を作り出している私たちに向けて、全ての人を等しくリスベクトする仏の世界として説かれています。わが身を仏法にたずね、浄土に生まれることを願う生き方こそが、「真の世界平和」につながるのではないのでしょうか。